

徴で、大木5式に比定される。県内では尾花沢市いるかい遺跡（前掲）で当該期の住居跡1棟が検出されているほか、遊佐町吹浦遺跡（山形県教委1988）からまとまった出土例がある。2～4類は後続する大木6式に属するもので、2類の結節浮線文は関東の十三菩提式や北陸の朝日下層式に出自を求めることができる。3類の綾絡文は2類土器の地文となることが多いが、出土資料は口縁部に施文されており、文様帯をもたない事例と言える。4類とした2点の資料は肥厚する口縁部に特徴があり、太い数条の沈線と連続した刻み目を施文するもので、遊佐町吹浦遺跡（前掲）等に類例が知られる。

第Ⅳ群土器1類は、沈線による区画内に撚糸圧痕が充填される文様構成から、大木7b式に帰属するものと思われる。2類は中期末葉の所産で、大木10式に比定される。大木10式土器については、宮城県大梁川遺跡（宮城県教委1988）の調査における、遺物包含層からの層位的な出土資料を基にした三分案が定着している。本遺跡出土の4点は口辺部の小片であり、細分に照合させるまでの情報が少ないが、調整沈線を伴う第29図6と稜の低い微隆起線が描出される7・9は10式古相に、稜をもつ隆線と無調整の沈線を施す8を10式新相として位置付けておく。

3 弥生時代の様相

第1次調査区の東・南縁辺域を主として多数の弥生土器が出土したが、調査区内に当該期の遺構は見当たらない。遺物の在り方から近隣に該期の集落が存在したことは当然考えられ、地形的に見れば付近で標高が最も高い1次調査区北側に面する畑地部分が該当すると目される。1次調査区東・南縁辺は旧河道の河岸段丘右岸に当たるが、この端部は幅約3mに亘る埋め立てによって形成された地形であると推察される。その堆積土内からは遺物総数の7割強に当たる数量が出土しており、主体を占めた弥生土器のほか、縄文時代や平安時代の遺物が混在した状態であった。調査に際しては東辺・南辺ともS X100と命名して掘り下げを行ったが、断面観察から東辺部は西（手前）から東（奥）に向かって堆積している様相が看取されたのに対し、南辺部では水平堆積であった状況から、均しながら埋め立てられたと考えられる。

近年の発掘において県内でも弥生時代の調査事例が増

え、竪穴住居跡の検出が3遺跡で報告されている。山形市河原田遺跡（山形市教委2004）では3棟の住居跡と6基の墓跡が検出され、墓跡のうち5基は東北地方で2例目となる木棺墓である。出土した土器は桜井式に併行することから、中期後半の年代が当てはめられる。山形市向河原遺跡（山形埋文2005）では中期末～後期の住居跡7棟を検出し、うち1棟は石器剥片が多量に出土したことから工房跡と推測されている。本遺跡の東南1.2kmに位置する南陽市庚壇遺跡（山形埋文2007）では、一辺5m規模を測る隅丸方形の住居跡1棟が確認され、天王山式に併行する遺物が出土した。さらに、現在整理作業中の南陽市百刈田遺跡からは、2005年度の第3次調査で土坑墓に係わる16ヶ所の遺物集中ブロックが確認され、中期後半の復元完形土器が多数出土している（山形埋文2006）。

東北地方の弥生土器は地域性が顕著であり、中期には北部・中部・南部に加えて奥羽山脈の東西でも差異が認められる。基本的には河川に則した水系によって地域が形成されるようである。弥生中期には地域差が一層鮮明になり、①津軽地方、②下北半島と馬淵川流域、③八郎潟周辺と雄物川流域、④北上川流域、⑤仙台平野、⑥最上川流域、⑦阿武隈川流域、⑧相馬・磐城海岸、⑨会津地方といった諸地域に区分される（須藤1996）。

本遺跡出土土器は会津地方と密接な関連が指摘され、第Ⅰ群とした1本の工具で描かれる沈線文土器は、会津若松市一ノ堰B遺跡（福島県教委1988）出土土器や同市川原町口遺跡（会津若松市教委1994）第8群土器に類似しており、器種構成も壺・甕・鉢・高坏・蓋と共通する内容である。本遺跡では全形が窺える資料は極めて少ないが、上記遺跡出土例に照らせば、数的主体を占める壺には主に口縁形態の相違から4種の存在が知られる。このうち長頸壺と無頸壺では、口縁部から体部上半の最大径を測る位置まで文様が施文され、これを境に下半には地文となる縄文が付される。甕では体部上端に結節回転縄文を施すものが一般的で、本遺跡例とも共通するところである。第42図に示した蓋と高坏は全て1本引きによる沈線文で、川口町口遺跡では高坏脚部に切り込みによる窓を設けたものもある。218～221は蓋の鈕部資料と見なしたが、類例が見当たらず、鈕部にも沈線が引かれることを考慮すれば、あるいは下胴に

括れを有する埴状形態の小形鉢である可能性も否定できない。また、鈕の天頂部が窪む形態の蓋も報告されており、これらは仙台平野や北上川流域の影響を受けているものと思われる。

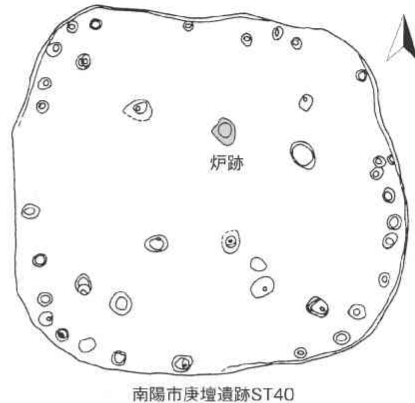
2本一対の平行沈線が施文される第Ⅱ群土器は、川原町口遺跡第9群土器や原町市桜井遺跡出土土器に類似性が求められる。同じ文様を重ねて繰り返す前段階の手法から、2本の沈線を同時に引くことで同じ形の文様を描く技法へと変化していく。この段階の土器組成は前段階を継承するものの、壺と甕は器形が近似するようになり、区別が困難なものが現れる。2本同時の平行沈線は第Ⅰ群の1本引きに比較すれば、一般に沈線の間隔が狭くなる傾向が指摘できる。桜井式土器は線間の広狭によってⅠ式とⅡ式に区別され、本遺跡の第Ⅱ群土器は3～5mm程度の幅を有するためⅠ式に比定される。また、長頸壺の頸部に断面三角形の隆帯を廻らすものがあり、桜井式土器のメルクマルとなっている。

このように1本描きと2本描きが混在する状況であるが、1本描き沈線文は中期末葉まで共存することが知られるため、編年的な時期差はないと考えている。したがって、本遺跡出土土器は総じて川原町口式併行段階と認識してよいと判断される。また、同時期の所産と把握される山形市河原田遺跡や、同市境田D遺跡(山形県教委1984)出土土器には1本描線の事例を伴わないことから、山形盆地では2本描き手法が主流であったと思われる。

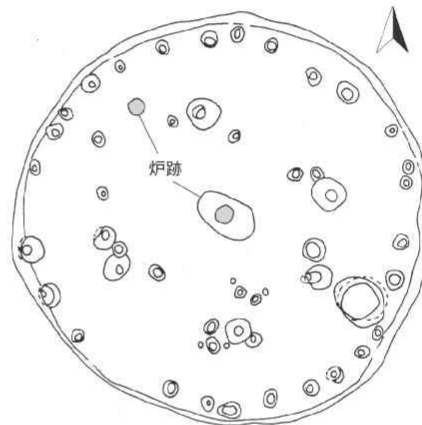
東北地方における弥生前期は地域間の土器様式の共通性が強く、最上川流域では酒田市生石2遺跡(山形県教委1987)や東根市蟹沢遺跡(加藤1989)等で知られるように、九州地方の遠賀川式土器が卓越している。すなわち、西日本の土器製作技術が伝播により持ち込まれ、東北地方の伝統的な土器作り技術と融合して受容されたことが窺われる。中期になると前述したように地域色が明確となるが、中期中葉は中・南部で奥羽山脈を境にした東西の地域差があまり見られず、土器分布が広範なことなどから、地域の交流が盛んであった時期とされている。また、仙台平野の遺跡を中心に多くの木製農耕具が出土し、貯蔵のための大形壺が製作されるなど、稲作を軸とする安定した農耕社会の基盤が確立した時期とも考えられている。後期には天王山式土器が広く発達し、これまで見られた地域色は消滅して統

一的な様相が確立される(須藤 前掲)。

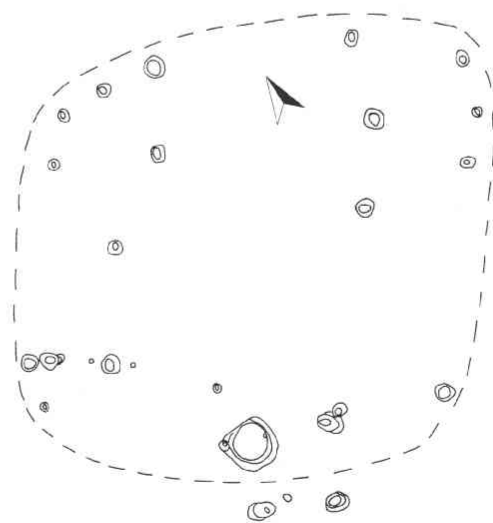
山形県では弥生時代の遺跡調査例はまだ少なく、前期から後期にかけての発展過程が明らかとは言えないが、近年の調査で集落や墓域の構成が徐々に解明されつつあることは確かである。



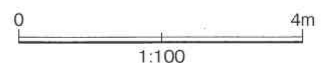
南陽市庚壇遺跡ST40



山形市河原田遺跡ST1068



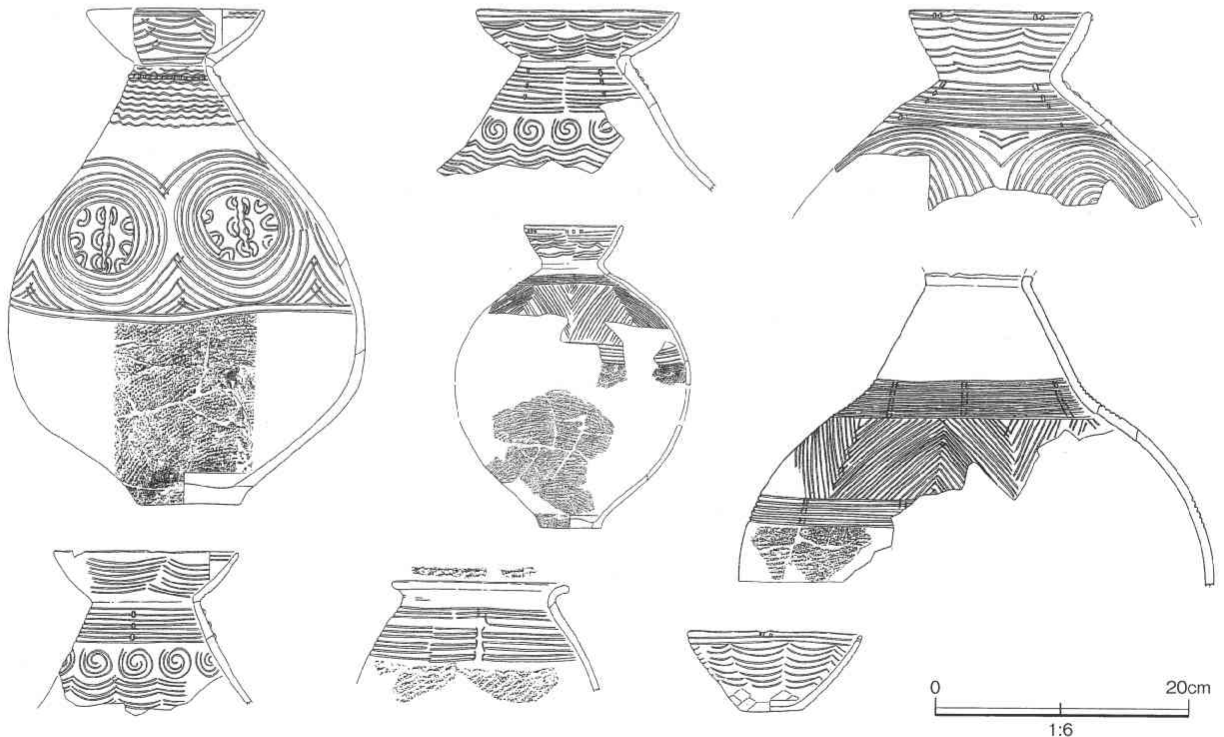
山形市河原田遺跡SI11



第49図 弥生時代の住居跡



1 本描き沈線文土器(第Ⅰ群土器)



2 本描き沈線文土器(第Ⅱ群土器)

第50図 川原口町遺跡出土土器